



ごめん、佐渡ね

佐渡総合病院 脳神経内科

寺 本 傑

当時の石原智彦総括医長より2020年12月異動が命じられ2021年4月佐渡総合病院に赴任し早4年目となりました。

皆様はボツリヌス治療をご存知でしょうか？一般的には美容分野でのシワ伸ばしが有名ですが、実は幾つかの保険治療も存在します。本邦では1996年以降、眼瞼痙攣、片側顔面痙攣、痙性斜頸、上肢/下肢痙縮、斜視、痙攣性発声障害、原発性腋窩多汗症、過活動性膀胱と、現在8疾患で保険収載されています。ボツリヌス毒素の機序は端的に「神経末端からのAch伝達阻害による筋収縮抑制や分泌抑制作用」で、この特性を製剤利用した治療です。適切に使用すれば副作用がほぼ無く、3-6ヶ月程度効果が持続するなど他薬剤や手術にない特徴も持ち合わせています。欧米では20年以上前から慢性片頭痛、花粉症、うつ病、書痙、手掌多汗症、本態性振戦、三叉神経痛、前立腺肥大症、歯軋り・食いしばり、梨状筋症候群など従来治療で行き詰まった際の一手として治療成績を残しています。残念ながら日本では保険医療制度の壁もあり、この薬剤のポテンシャルを引き出せず、全般的に欧米に治療技術が追い付いていないのが現状です。

私は早くからこの治療に興味がありましたが、当科寺島健志先生からアドバイス頂いた通り、まずは外来で自ら適応患者を集め始めました。各部署や外来体制を調整しつつ2021年9月片側顔面痙攣患者に対してボツリヌス治療を開始。これを皮切りに当科内、島内他施設、県内各施設から紹介頂くようになり、注射数はあれよと年間約140件まで増えました。新規治療を始めた手前の責任があるのは当然ですが、学会発表や診断・治療の技術研究開発など良い意味での「遊び」ができるよ

うになってきました。その一つに各疾患の有病率調査があります。なにせ島という isolate された環境の総合病院ですので、患者を一極集中に集めやすい、移出入が少ないという最大の特徴があります。ジストニア（不随意運動）疾患は生死に関わらないこともあり、世界でも大して調査されていませんでした。そこで、「ボツリヌス治療を行った眼瞼痙攣の有病率」について、従来欧米でのメタアナリシス（4.2）を上回る値（13.6）を2023年神経学会総会で報告、2024年9月のボツリヌス治療学会ではさらに積み上げて（同23.4）を報告しました。未治療、未受診患者も含めれば実際はもっと有病率は高くなりますが、いずれにせよ従来調査に比べ遥かに現実に即した貴重なデータだと思います。その他には、欧米と比べ本邦で著しく治癒率の低い（80% vs 40%）頸部ジストニア（痙性斜頸）の治療技術向上にも取り組んでいます。「nが少ないだろ」、「他施設との比較ができてないだろ」、「生死には関わらないだろ」などツッコミは考えられますが、他所でできない事をやることにこそ価値があり、何より患者のQOL向上と喜ばれているので、多分悪い「遊び」ではないのだと思っています。今後診療科やキャリアを問わずボツリヌス治療に関心ある方がこの県でも増え切磋琢磨して国内の治療技術が向上すれば嬉しく思います。自由診療の形でも良いので、治療に行き詰まった患者が恩恵に授かれる形を国内でも取れるよう模索したいと思います。

さて、医療の話ばかりも退屈ですので院外の佐渡生活について書きます。特筆すべきは食事が格別に美味しいことです。私も学生時に佐渡旅行をしましたが、これは実際に住んで四季を過ごしてみても初めて体験することができました。

春は山菜。行者ニンニク、フキノトウ、コゴメ、コシアブラ・・・etc 採れたて山菜の天麩羅や炒め物は絶品です。桜鱒で舌鼓を打ち春の訪れを堪能します。初夏の筍が終われば、夏は魚介。プリプリのサザエや岩かき、採れたての貝類の美味しさはそれまでの概念をいとも簡単に打破します。金北山水源のキレイな川で育った天然鮎は、全国でも希少で塩焼きや甘露煮として食生活に新たな彩りを与えます。佐渡では当たり前に入手に入る獲れたての鱈、鮪、鰹に真鯛、水蛸、海藻も夏を盛り上げます。南蛮エビ、バイ貝、鮑、キジハタ、メダイ、ノドグロ・・・まだまだ多くの魚を季節ごとに楽しむことができます。秋には医局イカ釣り大会、栗やキノコを新米で頂き、冬には格別の寒ぶりが待っています。一年を通して採れる本来の甘み、旨味のある野菜やトキ保護のため完全無農薬で育てられた佐渡産コシヒカリの美味しさには只々自らの無知を恥じる他ありません。果物もまた凄くクオリティです。初夏の苺・さくらんぼで先制点。夏～秋にかけてスイカ、桃、ぶどう、シャインマスカットで追加点。秋の宝石ビオレソリエス、幻の果実ポポー、おけさ柿の波状攻撃で相手の戦意を喪失させ、冬にはル レクチエ、みかん、リンゴ、キウイとダメ押し弾で完全失神 KO!! 目を覚ませば、空には満天の星空と天の川。やがて春が訪れます。

マック、スタバ、映画館、デパート、ボーリング場、アイスリンク、競馬場、雀荘 etc 無いものだらけですが、ここにあって都市に無いものも山ほどあることに気がきます。危うく本当に美味しい物を知らないまま死んでいくところでした。

全く個人的な事では、2023年度高校サッカー選手権で母校名古屋高校の初出場ベスト8を自慢しまくって周囲からは嫌われています。趣味のフットサルでは強力な仲間に恵まれ、2月上越選手権（新潟最古の大会）に初出場初優勝し上越人達を驚かせることができました。また YouTube チャンネルで医療情報の紹介をしたりと、楽しくやっています。

これまで多くの先生方のお世話になり現在があ

りますが、最後にとりわけ3人の大恩人にこの場を借りて感謝申し上げさせていただきます。まずは当科三瓶一弘部長。日々とおきの智慧とユーモアを授かり、新規治療時にはいつも適切なお意見、ご支援を頂き日常診療に役立てることができています。部長の釣って下さった鮎は、私の体の一部となり今後も生き続けます。2人目は循環器内科の松尾佑治先生。研修医時代、目標も頑張り方も分からぬ私を完全アウトなパワハラ（的）体当たり指導で医者としての動き方、考え方を熱く叩き込んで頂きました。2年間息もつけなかった研修の日々が懐かしく、あのかげがえ無い時間を本当にありがたく感じております。本当です。3人目は消化器内科の塚田芳久先生。たまたま医者の家に生まれただけで浪人するは留年するは、医者やる気も出ない、良く見積もっても“下の中”程度の期待値しかない子に「お前ほど医者に向いている奴はいない、流れを読め」と頂いたツカダノコトバにどれだけ勇気と自信を頂いたことか。県内の医療経済、組織体制、病院間連携、地域格差の解消、誰もやりたくない待ったなしの難題に切り込み、多くの非難を浴びても尚、命がけで新潟医療を守ろうとする生き様には、今もあの日と変わらず勇気ももらっています。今度は自分も新潟医療を支える一員のつもりで微力でも貢献できたらと思います。



上越選手権優勝！（下段右から2人目が筆者。上段右3人目は当院整形外科 Dr. 涌井）